

頭頸部がん患者の退院後の生活の 組み立て直しへの支援における 看護実践上の指針

大木 郁美 (応用看護学)

【キーワード】 頭頸部がん患者・生活の組み立て直し・からだの法則性・看護者の認識と表現

本研究の目的は、頭頸部がん患者との看護過程から、退院後の健康を意識した生活の組み立て直しへの支援に必要な実践上の指針を得ることである。研究対象は、頭頸部がんで入院治療中の患者への看護過程5事例12場面における看護者としての自己の認識と表現である。研究方法は、からだの法則性にあった働きかけを意識しながら日常業務の中で関わり、対象の生活の組み立て直しにつながったと思われる場面を再構成して素材化した。各場面を精読し、対象の変化に着目して局面に分け、看護者が〈何に着目し、どのように感じ考えて、表現しているか〉という視点から意味を取り出した。取り出された局面の意味から、抽象度を上げて「看護者の認識と表現の特徴」26項目を抽出した。さらに26項目の特徴についての内容の重なりを検討して類型化した結果、頭頸部がん患者がこれまでの生活を振り返り、退院後の生活の組み立て直しにつながるための看護実践上の指針として以下の6項目が取り出された。

1. がん治療を機に取り組む禁煙や口腔ケアの意味を、循環・体温・自律神経・脳の働き・免疫力などを関連づけて説明し、患者自身の取り組みが治療の始まりであると伝え、主体的に治療に向かえるよう支える。
2. 患者のこれまでの生活の様子に関心を寄せ、細胞劣化につながる食習慣や咽頭粘膜に有害となる喫煙・飲酒の習慣や口腔ケアの不足、不規則でストレス過剰な生活などに着目して関わり、患者自

身ががん発症に至る生活を振り返り変えていこうとするための機会をつくる。

3. 治療による口腔・咽頭の損傷は、摂食・嚥下に困難と苦痛を伴い悲観的になりかねないことを予測して関わり、局所の損傷は可逆であることを伝えて健康な細胞の再生と機能回復のために栄養を摂り入れる方法を共に探り支える。
4. 辛い治療を受けることに迷いや不安があると分かったときは正常細胞の働きと再生に関心が向くように関わり、治癒を促進する生活のあり方を共に考え、共に探る。
5. 治療終了後も口腔機能の障害が続く患者の絶望や諦めの気持ちを受け止めたときは、細胞は使ったようにつくられるという体の法則性を念頭に置き、訓練を続ける意志を支える。
6. 味覚異常や摂食障害が持続する状態で社会生活に戻り、家族と共に食を楽しめない孤独感や料理への不満が語られた時、本人にしか分からない辛い体験や複雑な心境を感じ取り、支える家族の思いにも心を寄せて関わる。